

活発であり、旧態然とした巡礼地信仰以外に大きな特色を見出すことができないのが現状である。ただ、そうした中で「聖観音宗」は唯一、布教活動や社会福祉活動が極めて顕著であり、たんなる巡礼地信仰からの脱皮が計られていることが認められよう。

さて、次に新教団群について見てみたい。まず、東京都立川市の真澄寺に本部を置く「真如苑」は、十一面観音、釈迦牟尼仏、不動明王を本尊とする真言系の教団であり、醍醐寺派の真言密教をその母胎としている。教勢は教会十三、教師二千五百人、信徒五十万人と公称され、最近では海外への進出も盛んであるといわれる。

次に「阿含宗観音慈恵会」は、京都の花山に本部を置く密教系の教団である。本尊は準胎観音、大日如来、釈迦牟尼仏で、教勢は教会六、支部三、教師三十五人、信徒五万人と公称されている。

次に「平和観音妙庵」は、本部を金沢市に置き、十一面観音を本尊とする教団である。教勢は、教師十人、信徒千人と公称されている。次に、岡山県に本部を置く「観音聖教」は、十一面観音を本尊とする教団で、『観音経』に説かれる現当二世の幸福祈願、大慈大悲利他行を教義としている。教勢は、教会一、支部十、教師二十人、信徒五千人と公称されている。

次に、表末に(附)として掲げた「世界救世教」は本部を熱海、箱根に置く神道系の教団であるが、この教団の以前の「本尊は千手千眼観音であり、教団名を『大日本観音会』と称していた。この教団は観音信仰と神道系の『大本』教の影響が強く表われており、純然たる観音信仰を中心とする教団とは異なるが、参考までに掲げておいた。教勢は教会二、教師四千人、信徒九十万人と公称されている。

以上、新教団群も既成教団群と同様に密教系のものが多いことが第一に指摘されるであろう。次に、「真如苑」や「阿含宗観音慈恵会」では観音は単独の本尊ではなく、参考にあげた「世界救世教」にいたっては本尊も教団名称もまったく変更され、これらの教団の観音信仰はまったく流動的といわざるを得ないであろう。唯一、観音を独立本尊とする教団は「観音聖教」のみである。またこれらの教団群は全国レベルから見て中規模および小規模で、いずれも教勢は発展途上段階にあり、すでに安定期に入ったとされる法華系新教団群等と比較してみてもかなりな差異のあることが認められよう。

これらの諸点を総合すると、観音信仰を中心とする教団のうち既成教団の多くは旧来からの庶民信仰に依存した巡礼地信仰の域を脱しておらず、教団としての活動も低下していることがうかがわれるのである。

また、新教団群はあらゆる面で発展途上の段階にあり、その観音信仰もいつ他のも

のに変化していくかも知れぬ流動的な要素の強いことが指摘できるであろう。このように見ると、仏教系教団群の中において、いわば観音信仰系教団群ともいべきものの地位は確立されておらず、その展望も実に不確実性に満ちているといわざるを得ないと思われる。

註① この表をまとめるにあたっては、文化庁『宗教年鑑』、仏教タイムス『仏教大年鑑』、雄山閣出版『新宗教研究調査ハンドブック』、金花舎『現代仏教を知る大辞典』、大蔵出版『新宗教の世界』等を主に利用した。

② 大蔵出版『新宗教の世界』I、一九〇頁。

③ 「聖観音宗」の布教活動は、各種の所属団体を設けて多方面におよぼされているが、一方、事業面でも幼稚園、病院、福祉会館等を設立して活動をおこなっており、また「仏教文化講座」をはじめとして各種の講座が開設されている。こうした活動は、ここにとりあげた他の既成教団に見られぬ「聖観宗」の積極的なカラーをよく示しているといえよう。

華林園と仏教

藤井照之

六朝の貴族知識人の仏教受容を考える場合、宮廷に附属する一庭園である華林園の存在が非常に重要な位置を占めていることがわかる。それは、華林園に於いて行われた仏教が特殊な仏教形態を示すと言うのではなく、華林園そのものが本来的な庭園としての機能を果たしたのみにとどまらず、仏教受容の為の重要な施設となっている点である。特にそれは齊・梁代に於いて顕著に見られる。そこで本稿では、華林園が仏教受容の上で如何なる機能・役割を果たしたかを明らかにしてみたい。

華林園の歴史は古く、魏の洛陽に於いて已に見ることが出来る。『魏志』文帝紀黃初四年の条の裴松之の注に次のように云う。

魏書曰、……是冬、甘露降華林園、臣松之按華林園即今華林園、齊王芳即位、改爲華林、

これを見ると、魏の齊王芳が即位したのにもない、齊王芳の諱を避けて華林園を華林園と改称したと云うのである。しかも、華林園は裴松之の南朝宋の時代まで続いていたと云う。但し、同じ『魏志』卷一三王朗伝の中では、已に明帝の時に華林園が存していたことが記されている。この点については多少の疑問もあるが、いずれにし

ても魏の時代に華林園が造られていたことは疑う余地が無いようである。

その後、洛陽の華林園は三国魏に続く西晋・北魏に於いても存続している。^①ところが、この洛陽の華林園とは別に、東晋の建康にも華林園は造られている。これは東晋の建康遷都にともない、洛陽に倣って造られたものと考えられている。建康に造られた華林園は東晋から宋・齊・梁・陳へと続くのである。このように永い歴史を有する華林園は、庭園本来の鑑賞用としての役割とともに、次第に多目的な利用がなされるようになっていった。『世説新語』言語篇を見ると、東晋簡文帝の話を挙げ、

簡文入華林園、顧謂左右曰、会心处不必在遠、翳然林木、便自有濠濮間想也、不覺鳥獸禽魚、自来親人、
とあり、また『晋書』卷八三王雅伝にも、

帝起清暑殿於後宮、開北土閣、出華林園、与美人張氏同游止、惟雅与焉、
とあって、東晋時代には未だ庭園鑑賞や遊宴の場として利用されることが多かったようであるが、宋代の頃から他の目的にも使用されるようになる。『宋書』卷八明帝紀を見ると、

於華林園芳堂講周易、常自臨聽、

として、華林園に於いて講義が行われたことがわかる。また同じ『宋書』の武帝紀や孝武帝紀には「車駕於華林園聽訟」「上於華林園聽訟」という記事が頻繁に見られ、帝が聴訟の場として盛んに華林園を使用していたことがしられる。このような利用面の拡大に伴って、華林園内の施設面での充実もなされるようになったようで、宋代頃から幾つかの施設の名が文獻の上にも現れるようになる。例えば前出の芳堂や竹林堂、延賢堂などである。

華林園の利用面での変化に於いて、とりわけ仏教文化による影響が著しい。まさに南朝貴族文化を特色づけた仏教の影響は、宮廷の附属施設である一庭園にまでも例外なく及んでいる。その一は、齊代頃から華林園に於いて仏教行事が催されるようになったことである。『南齊書』卷二五張敬兒伝に、

永明元年、勅朝臣華林八閤齊、於坐取敬兒、

とあるのは、華林園で在家信者の為の八閤齊が行われたことを示すものである。また『統高僧伝』卷五法雲伝にも、

通啓於華林園光華殿、設千僧大会、分此諸物、為五種功德、

として、華林園で催された千僧大会の記事が見える。華林園はこれらの仏教行事の他、また一には經典の講説や講論の場としても盛んに利用されていたようである。

『統高僧伝』卷五僧旻伝を見ると、

永元元年、勅僧旻請三十僧、入華林園夏講、僧正擬旻為法主、旻止之、
或曰何故、答曰此乃内潤法師、不能外益學士、非謂講者、

とある。ここに「夏講」とあることから考えて、おそらく齊代には華林園に於いて定期的な講義・講論なども行われていたのであろう。さらに同僧旻伝には別に、

天監五年、……勅僧正慧超、衡詔至房、欲屈与法龍法雲汝南周捨等、時入華林園、講論道義、

という記事もある。また『高僧伝』卷一〇保証伝にも講義の行われたことを次のように記している。

……後法雲於華林寺(殿)講法華、

以上のことから、華林園が仏教行事や講義の場にもなっていたことは明らかである。しかし、仏教行事や講義が行われたのは華林園に限られたわけではなく、梁武帝などはしばしば同泰寺に行幸して講義や捨身供養を行っている。^②但し華林園が宮殿に隣接していることを考え合わせるならば、帝にとって華林園が仏教行事や講義を行うのに大変便利な位置に在った為、頻繁に利用したものと考えられる。換言すれば、それ程までに仏教が帝の生活の中に深くはいり込み、身近なものになっていたということである。それは、南朝の貴族知識人にとって、仏教が信仰すべき宗教であると同時に、必須の教養となっていた為でもあろう。

ところで、この六朝時代は仏教整理の時代でもあった。仏教伝来以来の膨大な漢訳經典を整理集大成する為、経録類が作られ、収集した經典を収める経藏も造られるようになった。そして華林園にも宮庭の経藏が造られ、多数の仏教經典が集められたのである。『統高僧伝』卷一宝唱伝を見ると、

(梁武帝)勅安樂寺僧紹撰華林仏殿經目、……又勅唱重撰、……遂勅掌華林園宝雲經藏、搜求遺逸、……緣是又勅撰經律異相、

とあり、華林園に宝雲經藏が在り、しかも、その入藏目錄まで作られていたことが知られる。そしてこの蔵經を利用して、仏教の整理集大成につながる仏教類書である『経律異相』が作られている。これは、華林園が六朝の仏教整理の為の拠点にもなっていたことを示すものである。

以上見てきたように、華林園は庭園としての本来の役割とは別に、六朝時代を通して次第に多目的な利用がなされるようになっていった。特に仏教からの影響を大きく受け、講義・講論の場として利用されたり、在家信者を対象とする八閤齊などの仏教行事にも利用され、華林園は仏教受容の為に重要な一種の仏教施設としても機能していったようである。また華林園は、その中に経藏が造られたことによって、仏教整理

の爲の拠点としての役割をも果たしたのである。このように、華林園は六朝時代の仏教を明らかにする上で、見過ごすことの出来ない重要な施設であり、更に研究を進める必要がある。

註① 華林園については、村上嘉実「六朝の庭園」(『六朝思想史研究』所収)の中に詳細な研究がなされている。しかし、これは華林園を単なる庭園として取り上げたものであり、華林園が仏教受容に果たした役割については言及されていない。

② 宮室を造営しようとする明帝に対して、王朗が上疏した文の中で、華林(園)について次のように言及している。

今当建始之前足用列朝会、崇華之後足用序内官、華林天渚足用展游宴、……(『魏志』卷一三王朗伝)

また『文選』卷二〇「晋武帝華林園集詩一首」の李善の注に「洛陽図経」を引用し、

華林園在城内東北隅、魏明帝起名芳林園、齐王芳改為華林、とある。これが最も妥当な考察であろう。

③ 『晋書』卷五九趙王倫伝、

倫又矯詔開門夜入、陳兵道南、遣羽軍校尉齊王罔、將三部司馬百人、排閣而入、華林令駱休為内応、迎帝幸東堂、遂廢賈后為庶人、幽之于建始殿、……惠帝乘雲母車、鹵簿數百人、自華林西門出、居金墉城、……倫乃僭即帝位、……倫請宗室會於華林園、

『魏書』卷一三宣武靈皇后

太后与肅宗幸華林園、宴群臣于都亭曲水、

④ 清の趙翼は『陔餘叢考』の中で次のように云う。

其始本自洛陽有華林園、因而晋南渡後以吳旧苑仿之、於是建康之華林、

更に趙翼は、石虎が洛陽の規制に倣って鄴都にも華林園を造ったと云う。

⑤ 『宋書』前廢帝紀、

戊午夜、帝於華林園竹林堂射鬼、時巫覡云此堂有鬼、故帝自射之、

『宋書』卷六三殷景仁伝、

其夜、上出華林園延賢堂召景仁、

⑥ 『広弘明集』卷一九の陸雲「御講波若經序」(大正藏卷五二・二三五・b・二三六・b)の中で華林園について次のように云う。

華林園者、蓋江左以来、後庭遊宴之所也、自晋迄齐、年将二百、世属威

夷、主多奢侈、舞堂鍾肆、等阿房之旧基、酒池肉林、同朝歌之故所、自至人(梁武帝)御宇、屏棄色声……身心安樂、寔符歡喜之園、

⑦ 大正藏卷五〇・四六四・c。

⑧ 大正藏卷五〇・四六二・b・c。

⑨ 大正藏卷五〇・三四九・c。

⑩ 『梁書』武帝本紀の大通元年の条に「三月辛未、輿駕幸同泰寺捨身」とあり、同様の記事が『梁書』の中に頻繁に見られる。また同泰寺に於ける講經の記事も多い。

⑪ 朱僕「金陵古迹図考」参照。

⑫ 大正藏卷五〇・四二六・c。

⑬ 拙稿「梁代仏教における釈宝唱の役割」(『浄土宗学研究』第一四号所収)の中で、宝唱の『衆経目錄』について詳述している。

中国に於ける仏教の受容

— 支謙と康僧会 —

稲岡 誓 純

中国仏教史上いたって初期である三国時代の呉を代表する仏教者として、支謙と康僧会とが挙げられる。本小論においては、この両者を総合的に比較しながら、特に中国に於ける仏教の受容の上からの位置づける試みようとするものである。

支謙の伝記は、梁の僧祐撰の『出三藏記集』卷第三に支謙伝があるのみである。しかし同書卷第六道安伝、卷第七支敏度伝、そのほか梁の慧皎撰の『高僧伝』卷第一康僧会伝などにも付記されている。

康僧会の伝記は、『出三藏記集』卷第十三の康僧会伝、『高僧伝』卷第一の康僧会伝として収録されている。そのほか『釈氏六帖』卷第六、『六学僧伝』卷第二、『仏祖綱目』卷第二十三、『高僧摘要』卷第四などにも所収されている。

(一) 出生

『出三藏記集』卷第十三に

支謙。字恭明、一名越。大月氏人也。祖父法度、以漢靈帝世、率国人数百帰化。拜率善中郎将。

と、支謙は字は恭明また支越ともいい、大月氏系の帰化人で洛陽生まれである。